

帝都六家の隠し姫
かりそめの花嫁は氷の子爵に囲われる

加藤伊織 Iori Kato



アルファポリス文庫

第一章

大正十年四月。帝都東京は満開の桜に彩られ、それに浮き立った人々で活気づいている。

しかし、古びた長屋の一室ではひとりの少女がただじっと座り込んでいた。外の明るさとは裏腹に息が詰まりそうになるほどの静寂の中で、泣きに泣いて顔に涙の跡をつけ、涙が尽きたような疲れた表情は若々しい外見にそぐわない。

そのうつろな視線の先には、少女——美緒の母、十和子の骨壺があった。

美緒は母とふたり、常にぎりぎりの貧しい暮らしを送ってきた。妻子に向かつて暴力を振るい、酒と賭博に溺れている父から逃げてきたためだ。

裕福ではなかったが、美緒にとってはそれでも幸せだった。母子を脅かす父の影はなく、近所の住人とは当たり前のように助け合って温かい暮らしを築いてきた。

その中で奨学金をもらってまで高等女学院に通ったのは、成績の良かった美緒を見込んだ教師の勧めもあったが、その先に「職業婦人として自立し、これまで苦勞した母に楽をさせてあげたい」という想いがあったからだ。

女学院の最後の一年をほとんど残した今、その母はもういない。周囲の人ばかりか娘にまで病を隠し通し、美緒をひとり残して突然逝ってしまった。

「お母さん、私、これからどうしよう」

問いかけても、声は部屋の中に広がって消えていくばかり。穏やかに応えてくれた母の代わりには白い骨壺があるのみで、隣人の厚意でささやかな花が手向けられているだけだった。

遠くで神様が見守ってくれていると、これまではずっと思ってきた。けれど、今はそれも美緒に力を与えてはくれない。近くにいる誰かに救いを求めたかった。

女学院をやめて働くしかない、母を墓に入れるのにも金が掛かる。それら生活の心配もあるが、美緒の一番の悲しみは「母がもういないこと」に尽きた。

重い溜息をついたのは何度目だろうか。外が薄暗くなってきたのに気づき、灯りを点けようと立ち上がりとして足が痺れていることに気づいた。

そんなことにも気づかないほど、ただ座り込むことしかできなかった自分が情けなくて仕方ない。ささいなことにも涙を滲ませていると、突然長屋の戸が勢い良く叩かれ、そのままがらりと開けられた。

美緒が驚いている中、踏み込んできたのは中年の男性だった。痩せた体で顔色はあまり良くはない。服装はだらしがなく汚れも目立ち、美緒は顔をしかめた。

「どちら様ですか……？」

美緒が尋ねても彼は答えることなく、骨壺と位牌^{いは}に目を留めると下駄を脱いで上がり込み、ふらふらとそこへ歩み寄っていった。

——そして、彼は骨壺を掻き抱いて泣き始めたのだ。

「十和子、十和子お……なんで死んじまったんだよ。急に俺の前からいなくなってるんで俺より先に死んじまうんだ。ずっと一緒だってあの日言っただじゃねえか、だから家を捨てて駆け落ちしたんだろうが……十和子お」

美緒は痺れた足のまま、思わず男から遠ざかるように後ずさっていた。

泣き声と独り言の内容で美緒ははつきりと男の正体に気がついた。この男は、母を殴り、罵倒^{ばとう}し、いつもその後にはこうして「すまない、すまない」と泣いた。

自分も何度手を上げられたかわからない。その度に母は美緒を抱きしめて庇^{かば}ってくれた。

目の前で母の骨壺を抱いて泣く男は、十年振りに会う父に間違いなかった。美緒の記憶の中で父は仕事もせず賭博に溺れ、負けて不機嫌になつては酒を浴びるほど飲んで妻子に暴力を振るう恐怖の象徴だった。

「お父さん……？ どうして」

母は父の元から逃げるときに万全を期したはずだ。知り合いには転居先を告げず、

連絡は絶つたと聞いていた。

「美緒か？　ずっと探してたんだぞ。さあ、父ちゃんと一緒に行こう」

一瞬前まで泣いていた父は、美緒の姿を確認すると爪先から頭まで舐めるように視線を這^はわせ、下卑^{げび}た笑みを浮かべた。

「い、嫌……行かない」

「何言ってるんだ。母ちゃんは死んじまったんだから、俺と一緒に行くのが当たり前だろうが！」

突然の怒鳴り声に、美緒は思わず身を竦^{すく}ませた。幼い頃の恐怖が蘇^{よみがえ}ってきて震えていると、開け放されたままだった戸口から背の高い男がひよいと入ってきた。

「おい、武松^{たけまつ}。娘はいたんだろうな」

「このとおり、やっぱり母親に似て上玉に育ってますぜ。滝^{たき}の兄さん、少し色付けてくれねえか？」

自分よりかなり若い男相手に、父は揉み手をせんばかりの勢いで媚^こびを売っている。父の態度があまりにもコロコロと変わるので、美緒は呆然と成り行きを見守るしかなかった。

「ふざけたこと言ってるじゃねえよ。てめえでこさえた借金で娘を売り飛ばすしかなかったクズが、上玉だから色を付けろって？」

滝の兄さんと呼ばれた男は父を睨^ねめ付けると、吐き捨てるように言い放って長い脚で父を蹴り飛ばした。そして、そのまま美緒の腕を掴む。咄^{はな}嗟^さのことに悲鳴も出ず、美緒はただ男を見上げるしかなかった。

「悪いな、一緒に来てもらうぜ。あんたはこのクズ親父に売られたんだ」

「売ら……れた？」

言われたことの意味がわからずにオウム返しに呟^{ささや}いた美緒に、男は立つように促した。強く腕を引かれてよろめきながら美緒は立ち上がり、困惑の眼差しを父と男に交互に向ける。

「十六じゃお客は取れねえが、花街じゃ歳をごまかすなんてよくあるこった。とにかくあんたは二千円でこのクソ親父に売り払われたんだ。これから吉原^{よしわら}みたいな遊郭^{ゆうかく}にまた売られて客を取られるのさ」

男の言葉に美緒は思わず息を詰ませた。これから生活をどうしようとは思っていたが、それは貧しくとも一般庶民として誰に恥^はじることもなく生きるためだ。少なくとも、母は美緒が体を売るようなことを望みはしない。

美緒が目を見開いて滝を凝視していると、彼は痛ましいものを見るような目を美緒に向けながらも突き放すような言葉を吐き捨てる。

「おっと、俺を恨まないでくれよ？　武松^{たけまつ}が馬鹿なことさえしなけりや、こっちは苦

労してあんたら親子を探さなくても済んだんだ。迷惑掛けられたのはこっちも同じってことさ」

吉原、遊郭、客を取る……それらの言葉が頭の中で繋がって、美緒の心は絶望に染め上げられた。女学院をやめて働くなんてまだ甘い考えだった。十年間の平穏な日々で意識の外に追いやられてはいたが、武松は正真正銘美緒の父親で、美緒に関する権利を持っていたのだ。

「離してください！ 嫌あ！ お母さん、お母さん、助けて！」

「諦めな、母さんはその骨壺の中だろう？」

脅すようにはなく、美緒を宥めるように男が言い聞かせてくる。美緒が長屋中に響くような悲鳴でしか抵抗できないことにぼろぼろと涙をこぼしていると、間近から勢い良く戸が開く音がして、三人目の男が美緒と滝の間に割り込んできた。

「美緒！ どうしたんだ！ おいおまえ、この子から手を離せ！」

「千鳥兄さん！ 助けて、お願い……」

長屋の壁は薄い。美緒が悲鳴を上げたことで、隣人である千鳥が異変に気づいたのだろう。

縮模様の着流しを着た千鳥は、滝ほどではないが背が高い方だった。その代わり体は薄くて荒事には向いていそうにない。伸びっぱなしの髪を束ねた姿は優男としか言

いようがなかった。

けれど、滝は千鳥の姿を見て驚いたように目を見開いている。

「辰巳の兄い！ なんでこんなところに!？」

「ん？ おまえ……滝助じゃねえか。てことは、賭場絡みか。なんで美緒を連れていこうとしてる？」

千鳥は険しい目で滝を睨んだ。彼はばつが悪そうに溜息をついたが、美緒の手を離してはくれない。

「仰るとおりでさあ。その武松がうちの賭場で二千円も借金をためやがって、返せねえから娘を売るって言ってきやがった。その娘つてのが十年も前に嫁と一緒に出ていったっていうもんだから、探すところから手間かけさせられまして」

「武松か、おめえさんの話は聞いてたぜ。こんなクズがあのと千和さんの旦那かよ。妻の骨壺前にして娘売り払おうとするなんざ、恥ずかしくねえのか？」

武松を射殺しそうな千鳥の眼差しは、美緒が見たことのないものだった。それにこの滝という男と顔見知りらしいのも、美緒が知らなかった千鳥の一面だ。

けれど、美緒は兄代わりとして何年も面倒を見てもらった千鳥を信じていた。ただ、助けてと目で訴えることしかできなかったが。

「う、うるせえ！ 他人が口挟んでくるんじゃねえ！ 美緒は俺の娘だ、俺が金にし

「何が悪い！」

滝が目上の者として話している千鳥に対して、武松は腰が引けていた。けれど盛大に唾を飛ばしながら、虚勢を張って千鳥を退けようとしている。

「おい武松、偉そうな口を利くんじゃねえ。この人はてめえが散々迷惑を掛けた皆越の大親分の息子だよ。こんなところに住んでるなんて俺も初めて知ったがよ」

ヒツと武松が喉を鳴らす。皆越の大親分といえ、名の通ったヤクザ者だ。美緒が暮らすような下町では、任侠の徒として世話になることも多い。

「滝助、親父に俺のことを言うんじゃねえぞ。千鳥みたいにならついてるから、俺はここの辺じゃ『千鳥』って呼ばれてる。兄貴も知ってることだ。俺がいろいろ情報掴んで陰で助けてるんだからな」

千鳥は美緒を背に庇うように滝の前にしゃがみ込むと、彼を見上げた。

「——どうだ、俺に免じてそのクズをたたき出して、美緒はここに置いてって、全部なかったことにしてくれねえか」

千鳥が語った素性は美緒が初めて聞くものだった。確かに彼は時折ふらりといわなくなつては土産を持って帰ってきたりして、定職に就いている様子はなかった。しかし、まさか皆越の息子で情報屋もどきをしていたとは想像できるわけがない。

「俺も兄貴には世話になったから、そうしたいのはやまやまですがね、二千元って大

金が関わってるんでさあ。俺ひとりでもみ消せる問題じゃねえんだ。そうだ、兄貴が大親分に掛け合ってくださいよ。それならなんとかなるかもしれないねえ」

「……いや、それは無理だ。親父に直接会ったら今度こそ逃げ出せねえ」

苦しげに千鳥が呻く。彼は兄とは繋がりがあつたというが、父に居場所を知られるのはまずいのだろう。

「仕方ねえ……滝、できるだけ美緒を売り飛ばすまで時間を稼いじゃくれねえか。美緒、必ず助けてやるから、俺を信じて待つてろ。俺が直接助けられるわけじゃねえが、おまえを助けてくれる相手に心当たりがある」

美緒の顔を覗き込んでくる千鳥に、美緒はただこくりと頷いた。絶れる相手は、目の前の兄代わりしかない。

「いい子だ」

人懐こい笑みを浮かべ兄ぶってみせているのは、美緒のよく知る千鳥だった。

滝は美緒の手を引いて家から連れ出したが、決してそれは力尽くではなく、多少の気配りを感じられた。武松は千鳥が長屋から蹴り出して、台所にあつた塩を盛大にぶちまけられているのを見た。

「これから、どうなるんですか」

千鳥のことは信じている。けれど心細さに美緒が滝に尋ねると、滝は同情のこもつ

た目を美緒に向けていた。

「あんなクズを親父に持ったばかりに可哀想になあ。……辰巳兄貴がああ言ったからには、二千元を用立ててあんたを買い取れるような相手に助けを求めるんだろうよ。そんな人間、俺には見当も付かねえが」

二千元とは美緒にとつてとんでもない大金だ。美緒が目指す、女性にとつての高給取りであるタイピストですら月収は四十円ほどのだから。

「俺たちは武松の借金を回収できれば、どんな形でも構わねえんだがよ」

もしかすると、本気を出してこの手を振り払い、入り組んだ地形を利用すれば逃げられるのかもしれない。そんな考えが頭をかすめたが、美緒は頭を振って自らそれを否定した。

そんな大立ち回りをするには、気力があまりにも尽きていた。今の美緒にできることは、滝に手を引かれるまま従順に付いていくことだけだった。

美緒が車で連れていかれたのは広い屋敷だった。滝は車内では武松についての愚痴（ぐち）を延々こぼしていた。彼の口振りで、自分以外の人間から見ても武松はどうしようもない人間なのだと、美緒は再確認した。

「悪いが、ここに入ってくれねえか」

敷地の隅にある離れに連れてこられ、滝が申し訳なさそうに美緒に促す。美緒は示

された部屋を見て言葉を失った。

四角い部屋に畳は二枚だけ。ひとりで過（こ）すには無理ないが、部屋の入り口は下半分が格子状になっており、鍵が付いているいわゆる座敷牢だったのだ。

「辰巳兄貴が嬢ちゃんのこととはなんとかするだろうよ。あの人はやると言ったらやる人だ。だけど、それは嬢ちゃんと俺だけの秘密だぜ。おおっぴらにあんたの扱いを他と変えるわけにはいかねえんだ。わかってくれるな？」

背の高い滝が、背中を丸めるようにして美緒に言い含めてくる。それに美緒は小さく頷き、おとなしく部屋に入った。

滝がほつと安堵の表情を浮かべてから入り口の南京錠（なんきんじょう）を施錠する。カチャリという鍵の掛かる音が、思っていたよりも冷たく響いた。

「なんか不便があったら呼びな、この辺には誰かしらいるからよ。だけど、頼むから逃げ出そうとは思わないでくれな」

それにもこくりと頷いて、美緒は部屋の奥で座り込んだ。窓のない座敷牢は薄暗く、ひとりきりになると心細さが募（も）ってきた。

「お母さん……お母さんは『幸せになるには人を幸せにすることだ』と言ってたけど、私は誰を幸せにしたら自分が幸せになれるの？」

母を責めるつもりはないが、縋（も）って答えを求めたくなる。

母と一緒に苦労してきた日々は、苦しくても幸せだった。間違いなく、美緒の幸せは母と一緒にあったのだ。

壁にもたれて、両手で宙に球を描くようにする。実際には存在しない鞠を持つているような感じだ。

「トホカミエミタメ……」

普段は柏手を打つが、今は音を響かせるのに気が引けるからそれはせずに、ただ母から教わったおまじないの言葉を唱える。すると手の間に薄青く光る球がぼんやりと浮かんだ。それを見ていると優しい光に心が落ち着いていくのを感じる。

「遠くに御座す神様、どうかお恵みをもたらしてください」

自分のことを祈るのではないと母に言われていたが、今は神頼みをしたい状況だった。千鳥は美緒が知っているよりも顔が広いと薄々知っていたが、二千元もの金をぼんと用意してくれる人がそうそう見つかるはずはない。

誰かに見られたら困るということに気づいて、美緒は球を消した。そして部屋の隅に積んである布団にもたれかかって一日を振り返る。

母の葬儀は昨日だった。火葬場で一緒に骨上げをしてくれたのは千鳥で、帰ってきてからの記憶がストンと抜けている。

気がつけば、昨日の着物をそのまま着ている。布団を敷いて眠った記憶もないので、

床に倒れ込むようにして眠ったのかも知れなかった。女学院に行くときには編んだ髪にリボンを着けているが、葬式の間でリボンを着けるなど考えられず、今は髪が所々ほつれているが自分でもわかる。

「おい、嬢ちゃん」

「とんでもない一日だったと思うっていると、戸の前で滝がしゃがんで美緒を呼んでいた。」

「……美緒です。中村美緒」

「そうか。美緒ちゃんよ、これ食っておけ」

滝が戸の隙間から入れてきたのは、麦ご飯を握って海苔を巻いた不格好な握り飯がふたつ載った皿と、白湯の入った湯呑みだった。

「今は、あまり……」

「だろうよ。あんなクソ親父と十年も離れてられたのに、突然現れたと思ったら売り払われて座敷牢の中だもんなあ……」

我がことのように溜息をついた滝は、それでも美緒の方に皿を押しやってくる。

「でもよ、こういうときこそ氣力と体力は養っておかねえとなんねえよ。脱走されるのも困るが、辰巳兄貴が助けに来たときにあんたが干からびてたら俺がもっと困る。ポコポコにされて説教だよ、わかるか？ あの人説教の怖さが」

「……ふっ」

初めて見たときはただ恐ろしいばかりだった男が、背を丸めて頭を掻いている様子は美緒の笑いを誘った。千鳥は暴力を振るったり偉そうな説教をしたりする人間ではないが、もしかするとこういう環境でなら、そういうことをするのもかもしれない。

いや、それよりは滝が大げさに言っただけで、美緒に食事をとらせようとしているのだろう。彼は千鳥が現れてからずっと、美緒に厳しい態度を取ることもなく同情的だった。

皆越の大親分が正月に餅を配ったり、裕福でない長屋にいろいろと便を図っているのも知っている。堅気ではない人間が全員悪人ではないことくらいは美緒もよくわかっていた。

「ありがとうございます。……いただきます」

皿と湯呑みを引き寄せて、手を合わせて頭を下げてから白湯を一口飲み、握り飯を手にした。少し塩が効きすぎた握り飯だったが、今の美緒には味がなく余程食べやすい。少しばかりでも胃に物を入れると、案外自分が空腹だったことに気づく。こんなときでも、体は生きようと正直だ。

握り方が下手なのか、麦ご飯にしてもポロポロと崩れやすい握り飯だった。口元に米粒が付く度に丁寧なそれを指で摘まんで口に運ぶ美緒を、滝が見張りもかねてな

か座敷の外から眺めている。

「あんたの母さんはよ、余程いい人だったんだなあ。あの武松からこんなまともな嬢ちゃんが生まれるって事実が、俺には信じられねえよ」

「母は、裕福な家の出だったようです。父とは駆け落ちをしたと聞いています」

「お嬢さんだったってわけか。武松はクズだけだよ、いつからそうなのかは俺は知らねえ。案外、結婚するまでは真面目ない奴だったってこともあるかもしれねえだよな」

「はい、母もそう言っていました」

ひとりで握り飯を食べるのは寂しかっただろうが、滝が母の話に付き合ってくれるのが正直美緒の心を軽くした。彼は完全な味方ではないが、少なくとも母を悪くは言わない。

綺麗にふたつの握り飯を食べて白湯を飲み干すと、美緒は「ごちそうさまでした」と頭を下げた。

皿と湯呑みを外に出すと、「お粗末様」と滝がそれを持って去っていく。

握り飯ふたつでも、胃に入ると安堵で眠くなってくる。美緒は畳んだままの布団にもたれかかると、目を閉じた。

目が覚めたら全部夢だったらしいのに。

そんな詮^{せん}無いことを思う自分が、自分でも滑稽^{こっけい}に感じた。

周囲の騒^{さわ}がしさに美緒が目を覚ましたとき、辺りはすっかり暗くなっていた。部屋には灯りがないし、外は新月で微^{かす}かな星明かりしか期待できない。

バタバタと複数の人数の足音がして、滝の「お待ちください！」という悲鳴のような声、それと聞き覚えのない男性の「早く美緒さんを返してください」という威圧感に満ちた声が美緒の元まで届いた。

千鳥が言っていた「助けてくれる相手」がやってきたのかも知れない。けれど、期待しすぎては違ったときに絶望が深くなる。

美緒は葛藤しながらも、入り口の格子戸を掴んで外の様子を窺った。小走りにやってきた滝が、慌てながら南京錠を開けて美緒に出るように促した。

「美緒さん、ご無事でしたか」

そう美緒に声を掛けてきた相手を、やはり美緒は知らなかった。暗い中ではっきりとは見えないが、背は高めで背広をきつちりと着た紳士のようなだった。

「私の婚約者を勝手に連れていかれては困る。こちらも黙っていられますよ」

見知らぬ男性は座敷牢から出た美緒を背中に庇うようにすると、冷たい声で滝に向かって言い放った。

「いえないえ、こちらまさか美緒さんが南条^{なんじょう}様の婚約者だとは知らずに……誠に失礼をいたしましたが、美緒さんは父親の借金の形に売られたもんで。こっちも困ってるんですよ、大恩ある退魔^{たいま}六家の南条様の婚約者とあらばすぐにでもお返ししたいが、二千元という大損は簡単に埋められるもんじゃねえですから」

話の流れでどうやら自分がこの「南条様」の婚約者として扱われていることに気づき、美緒はぎよっとしていた。

滝は男性の話がでまかせだということを知っているはずだ。千鳥との会話があったのだから、千鳥の知人で金を工面できる人間が来ただけだとわかっているはずなのに、必要以上に萎縮してへりくだっているように見える。

おそらく、美緒を背中に庇う青年が「退魔六家」の人だからだろう。

帝都の全ての人が退魔六家の働きを知っているわけではないが、政治に関わるような偉い方や、それこそ皆越の大親分のように帝都の仕組みに食い込んでいるような人は、退魔六家を知っていると母は生前に言っていた。

「わかった。彼女の父親の代わりに私がその借金を払おう。これで美緒さんを解放してもらえるな？」

「仰せのとおりに。南条様にご迷惑をおかけして、誠に申し訳ありません」

青年に付いてきたとおぼしき初老の男性が、背広の内ポケットから紙を一枚取り出

し、何かを書き付けると滝に渡す。滝はそれを確認すると床に座り込んで青年に向かって土下座をした。

「二千円の小切手、確かにお預かりいたしました。これで武松の借金は帳消し、美緒さんは自由の身です」

「……ということですよ。美緒さん、帰りましょう」

「は、はい」

あくまで「美緒を以前から知っている婚約者」のように振る舞う青年に合わせて、美緒も頷いてみせる。

早足な青年に付いていきかけ、美緒はふと足を止めて振り返った。

「あの、滝……滝助さん、いろいろお気遣いいただいてありがとうございます」

滝は美緒を家から連れ出して座敷牢に入れたしたが、それは彼の仕事の一環だ。むしろ氣遣われたことを美緒は知っている。

美緒の言葉に滝は驚いたように顔を跳ね上げさせると、くしゃりと笑った。それは案外幼さの欠片^{かけら}が残るような笑顔だった。

用意されていた車に乗り込むと、美緒は青年の隣に座ることになった。乗り慣れない車に見知らぬふたりの男性。美緒を助けてくれたことには違いないが、美緒は緊張

で握り拳を膝の上で揃え、固まった姿勢で座っていた。

「急にあんな連れ出し方をして申し訳ない。辰巳先輩からできるだけ急いで助けて欲しいと頼まれたもので」

先に口を開いたのは青年の方だった。礼を言いそびれていることに気づき、慌てて美緒は彼に向かって頭を下げる。

「こちらこそ、お助けいただきありがとうございました。あの、大金を用立てていただいて、大変感謝しております。一生掛けてもお金はお支払いいたします」

美緒が頭を上げると、間近から顔立ちの整った青年が青みがかった目でじつと美緒を見据えていた。先程の武松のように女として値踏みするような視線ではなく、美緒の価値を判じているかのような冷たい視線だ。

「南条蒼真^{まこと}です。先程も言いましたが南条家の当主で子爵^{きしやく}という立場にあります」

青年は美緒に向かって自己紹介をし、軽く会釈^{えしやく}をした。それに会釈を返した美緒は、彼の言葉の続きに思わず息を止めるほど驚いた。

「中村美緒さん、貴女は自分が退魔六家のひとつ、北大路家^{きたおおじ}の血を継ぐ退魔師であることについて、お母上から話は聞いていますか？」

「えっ？ 北大路家……ですか？ いえ、母は生前自分の出自については何も申し出ておりませんでした」

退魔師という言葉も初耳だ。美緒が目丸くしていると、蒼真は呆れるでもなく淡々と説明を始めた。

美緒の母・十和子は退魔六家のひとつである北大路家の娘だが、退魔師としての力を継いでいなかった。十和子には歳の離れた兄がおり、既に次代の退魔師として能力が確認された姪もいた。

北大路家にとって十和子は、余所^{よそ}に嫁がせるための道具でしかなかった。そのせいか「この家に自分は不要」と判断してしまったらしい彼女は、年若いうちに御用聞きとして出入りしていた武松と身分違いの恋に落ち、駆け落ちをして行方をくらませてしまったのだという。

「全く知りませんでした、母が、退魔六家の血筋だったなんて。——でも、退魔六家の方々がこの帝都を守ってくださっているという話は幼い頃からよく聞いていました。——あ、ではもしかして私のこの力が？」

トホカミエミタメと唱えたときに現れる青い光のことに思い至って美緒が考え込むと、蒼真はその言葉に反応したように美緒の方に体を向けた。

「その力、今見せてもらうことはできますか？」

「は、はい。——トホカミエミタメ」

柏手を打ってまじない言葉を唱えれば、美緒の両手の間にほわりと青い光が浮かぶ。

数をみつつほど数えてから、美緒はそれを消した。息を詰めて美緒の力を見ていたのか、蒼真は深い溜息をついている。

「美緒さん、先程『一生掛けてもお金はお支払いします』と言っていました、それは返さなくて結構です。貴女は退魔師が失われたと思われていた北大路家に残された唯一の退魔師。二千人なんて金に比べられる存在ではないのです」

「で、ですが私にできることはこのくらいですし、とてもそんな大事な御役目を務められるとは」

蒼真が話すことは全て美緒の予想外のことばかりだった。自分に価値があると言われても実感はないし、北大路の次代の退魔師は母が出奔^{しゅっほん}したときにはいたはずではないか。

「では、私と結婚してください。あの場では『南条家の婚約者』という立場で貴女を無理矢理連れ出す口実にしましたが、ちょうどいい。私もいい加減に身を固めろと方々から言われて閉口していたところです。平民であつても母方が北大路家の令嬢で退魔師とあれば、誰もこれ以上口を挟めない。受けていただけますか？ それとも、他に既に縁談が決まっているということは」

蒼真が続けた言葉は、更に美緒の思考を止めるに値するものだった。初対面の男性から求婚されるのはあまりにも想定外だ。

けれど、世の中には婚礼の場で初めて顔を合わせるような夫婦もいる。——何より、蒼真は美緒にとっては人生で最大の恩人で大金を払ってもらった負い目もある。そこになんの気持ちもなくても、断ることなどできはしない。

「いいえ、まだ女学院に通う身で、母子で慎ましく暮らしておりましたので縁談などはありませんでした」

決まった嫁ぎ先はないと説明すると、蒼真が軽く頷いた。美緒のことを一瞥したが、車内の暗さもあり彼の感情を表情から読み取ることはできない。

「では、今日から貴女は私の婚約者です。受けていただけますかと言いましたが、貴女に断る選択肢はありません」

がん、と何かに頭を殴られたような衝撃を美緒は受けた。冷たい声で蒼真が言い放った一言は、結婚に夢を見てはいなかった美緒ですら悲しくなる内容だった。

唇を噛み、否と言いたい気持ちをぐっと堪える。蒼真の言うとおり、自分には端から選択肢などなかった。これは貴族から平民への命令であり、美緒はまた二千円という借金と引き換えに「買われた」だけなのだ。

「——蒼真様のお申し出、ありがたくお受けいたします。ふつつか者ですが、どうぞよろしく願います」

自分の口からすらと出てくる言葉を、美緒の頭の片隅でもうひとりの美緒が不

思議そうに聞いていた。

「あの、蒼真様、どちらに向かっているんでしょうか」

車がどうやら山の手に向かっているらしいことに気づき、美緒は蒼真に行き先を尋ねた。美緒の住んでいる長屋とは、方向的に全く逆なのだ。

「もちろん、南条家です。貴女には今日から我が家で暮らしてもらいます」

「今日から、ですか？」

さも当然のように言う蒼真に美緒は驚くしかなかった。てっきり、家に帰してもらえるのだと思っていたのだ。

「今日からです。辰巳先輩——ああ、貴女に千鳥と名乗っていた伊倉辰巳氏は、私の高等学校時代の先輩なのです。変わった人で、大分いろいろ私も世話になりましたよ。その辰巳先輩から、貴女が退魔六家の血を継いでいて力を持っていることと、父親の借金の形に連れ去られたので助けて欲しいという連絡が来て、私はあの場に行きました」

蒼真の口から、美緒が連れ去られた後に千鳥が取った行動が語られる。なるほど、高等学校時代からの付き合いであれば、千鳥は確かに金を用立てられる相手としてすぐに蒼真を思い浮かべることができただろう。しかし、何故彼が美緒も知らない血筋

のことを知っていたのかは疑問が残る。

「皆越組は退魔六家のことを知っているし、ああして元の借金に上乘せすることなどもなく貴女を解放してくれましたが、もし他のヤクザ者だったら？ 貴女の父親が他の賭場で借金を作っていない保証は何もないですよ。つまり、貴女を元の家に帰すのは危険だから、安全な我が家で生活してもらいます。——理解してもらえますか」

蒼真が理路整然と並べた理屈は、美緒が見落としていた危険を指摘していた。

確かに、あの父が他に借金を作っていないなど、信じることはできない。逆に美緒があそこで暮らし続けたら「もう一度売れる」とばかりにまた借金の形にされるかもしれない。なにしろ、住んでいるところは既にばれてしまったのだ。

ぶるりと美緒は恐怖に身を震わせた。蒼真の判断に救われたと感じると、ますます彼に異を唱えることはできなくなった。

「その可能性は失念しておりました。……確かに私があそこに居続けたら、父がまた無心に来るかも知れないし、千鳥兄さんにも迷惑を掛けてしまう。申し訳ございません、何から何までお世話になってしまつて」

「氣にすることはありません。貴女は私の婚約者として過ごせばいいだけです。女学院に通っているなら礼儀作法などは問題ないでしょうが、子爵家の妻としての務めな

どは学んでももらいます。それと、退魔の役目も。——逆に言えば、それ以外は私は貴女に望んでいません」

「……はい」

当たり前のように「それ以外は望んでいない」という蒼真の一言に、美緒は「婚約者」と言いながらも彼的美緒への明確な拒絶を感じ取った。

四月の夜の寒さとはまた違う冷たい風が、窓が閉まっているはずの車内を吹き抜けた気がした。

広い場所で車が止まったので、南条家に到着したのだろう。運転していた初老の男性が蒼真の側のドアを開け、次に美緒の側のドアを開けてくれた。

彼の手を借りて車を降りると、蒼真が先に家に入ろうとしているところだった。

南条家は美緒が呆れるほどに大きく、夜闇に浮かび上がる洋風の建築が威圧感すら持っていた。

慌てて蒼真の後を追うと、玄関ホールに使用人が三人集まって蒼真を出迎えていた。「お帰りなさいませ」

五十絡みの女中を始めとして、使用人たちが次々と蒼真に頭を下げる。

玄関ホールに飾られた時計は既に午後十時を示していた。こんな時間にいるのは住

み込みの使用人なのだろう。

「遅くなった。彼女は中村美緒さん、今日から私の婚約者としてこの家で暮らしてもらう。退魔六家の力を継いでいる大事な人だからそのように扱うように。キヨ、客間に案内してあげなさい。美緒さん、今日からここが貴女の家です」

上着を脱いだ蒼真は使用人のひとりにそれを預けると、美緒の方を振り返りもせず彼らに告げた。

突然婚約者と告げられて使用人の顔には軽い困惑が浮かんでいたが、彼らは「はい」とだけ蒼真に応え、それぞれに動き出した。

「美緒様、こちらへどうぞ」

「は、はい」

キヨと呼ばれたふつくらとした女中が美緒を案内する。その背に付いて歩きながら、美緒は彼女の後ろ姿に向かって謝った。

「申し訳ありません、こんな遅い時間にご厄介になることになって」

「いいえ、この家ではいつお客様がいらつしゃつてもよろしいように常に準備をしておりますから。美緒様が気になさることではありませんよ」

「その……私のことを『美緒様』などと呼ぶのはやめていただけませんか？」

自分は平民で、本来女中になる側の人間だ。それに母よりも歳上の女性にそのよう

に呼ばれるのは気が引けた。

けれど、キヨは振り返ると静かに美緒に言い聞かせる。

「美緒様はこの家の主人である蒼真様の婚約者です。私どもの方から気安い口を利くわけには参りません。それと、使用人に対して敬語で話すのもおやめください。美緒様はいずれこの家の女主人となられる方なのですから」

「……はい」

キヨの言葉は良家の子女が多い女学院に通う美緒にとつては理解できるものだが、良家の女中として勤めることになったらという立場から以前は考えていた。

まさか、自分が子爵の婚約者として扱われるなど、夢にも思ったことはない。

「こちらです。風呂場が空きましたらすぐお知らせしますから、それまでおくつろぎください。何か軽いお食事でもお持ちしましょうか？」

「あ……いえ、お気になさらず」

通された部屋は美緒の住んでいた長屋の数倍はありそうな広さだった。大きなベッドが置かれている以外に、瀟洒なテーブルと椅子のセットもあり、壁には色鮮やかな花瓶を描いた絵が飾られている。

圧倒的に自分とは不釣り合いな部屋に美緒が縮こまっていると、キヨは小さく溜息をついて美緒の前に回り、その手を取った。温かい手に美緒が顔を上げると、少し

困ったような顔をした祖母くらいの年回りの女性が美緒を覗き込んでいる。「これから言うことは、使用人じゃなくてお節介なばあさんの言葉だと思って聞いてください。——こんなに疲れた顔をして可哀想に」

キヨは厚めの手のひらで美緒の手を包み込み、小さなこどもにでもするようにその手をさすってくれた。その温かさは母が死んでから美緒が望んでも得られなかったもので、突然のことに美緒は戸惑う。

「旦那様は気を遣える人じゃないから、若い娘さんがしわくちゃの着物を着て髪の毛ボサボサにして、顔色を悪くしても全然気づかないんですよ」

「そ、そんなことは……」

蒼真は美緒の窮地を救ってくれた恩人だ。これ以上を望むことはおこがましいとすら美緒には感じてしまう。けれど、「子爵家の妻としての務めと、退魔の役目以外は望んでいない」と冷たいとも言える言葉を投げかけられたのも事実だった。

キヨは辛抱強く、俯うつむいている美緒の心を開かせるように話し掛けてくれる。

「お腹を空かせてたら眠れないでしょう？ お腹を満たして、お風呂で温まって、それでゆっくりおやすみなさいな。旦那様が慌てて出ていかれたのは私たちも見えます。こんな時間になったのも、それだけのつびきならない事情がおりなんでしょう。ここは安全だから、気を楽にしていんですよ。だって——今日からここが、あなたの

家なんですから」

ずっと美緒の手を温めてくれていたキヨが、蒼真と同じ言葉を口にした。

ああ、同じ言葉なのに、蒼真とキヨでは温かさがこうも違う。キヨの一言で美緒の中で張り詰めていた糸が切れた気がした。

「ふえっ……うわあああん！」

今日一日堪えていたことが、堰せきを切って溢れ出す。幼子のように泣きじゃくる美緒をキヨは胸に抱き留めて、その背中をさすってくれた。

「わたし……わたし、お母さんが死んじゃって、お父さんには借金借金の形に売り飛ばされて、隣の兄さんは必ず助けるって言ってくれたけど、ずっと怖くて」

「まあまあ、とんでもない目に遭われたねえ。さぞ怖かったでしょうに、よく辛抱したこと」

キヨの声は嘘偽りなく美緒をいたわるものだった。だから美緒もその優しさに甘えることができる。

「でも、蒼真様が本当に助けてくださったんです。——私に退魔の力があるから。だから婚約者になって、退魔の役目を果たして欲しいと。でも私にはそれ以外は望んでいないと言われて、心細くて」

キヨはこの家の使用人だから、蒼真の悪口めいたことを言うのは気が引けた。それ

でも胸に塊^{かまきり}としてつかえているこれを吐き出さなければ、この家に居続けることはできそうになかった。

「旦那様は、年頃のお嬢さんに向かってなんてことを言うんですかねえ。……美緒様、退魔六家のことは知ってますか？」

「幼い頃に母から聞きました。この帝都を守ってくださっている方々だと」

泣きながらつかえつつかえ美緒が答えると、キヨは頷いてみせた。

「そう、とても大事な御役目なんです。旦那様にとっては、命に替えても果たさなければならぬというほどの。それだけ大事なことを、旦那様は美緒様に望んでるんです」

キヨの一言で美緒ははっとした。蒼真の言葉が耳の奥に蘇る。

『逆に言えば、それ以外は私は貴女に望んでいません』

あの一言は限りなく冷たい感情を美緒に突きつけているように思えたが、帝都を守る大事な役目はとてつもなく重いものだ。蒼真にとっても、どれだけ使い物になるかわからない美緒に負わせるのは賭けに近いことだろう。

「私……とても大事な御役目を任されたのですね？」

「ええ、そうです。美緒様、蒼真様と一緒にこの帝都を守ってください。これまでも三百年以上の長きにわたって、あなたのご先祖がなさってきたように。今、この帝都

が平和なのは、退魔六家のみなさまのおかげなのですよ」

『この帝都には「退魔六家」と呼ばれる方々がいらっしやって、災いから人々を守っているのよ』

かつて、幼い頃に母から聞いた話だ。退魔六家のことを知っている人は周りにおらず、何故母はそんなことを知っているのだろうと思ったこともあるけれど、母がその血筋だったからだと今日になって腑に落ちた。

「私には、私にしかできない大事な御役目があるんですね」

散々泣いた涙を拭い、美緒はキヨの目を正面から見た。その目からは心細さや迷いが消えていて、成すべきことを知った者だけが持ちうる強さが宿っている。

「どれだけのことができるかはわかりませんが、蒼真様と一緒にこの帝都を守ります。母のご先祖様が、そうしてこの街を守ってくださいたいように」

きっぱりと美緒が言いきったとき、折悪く美緒の腹の虫が鳴いた。顔を赤らめる美緒に、キヨは「夜食をお持ちしましょう」と笑って手を一際強く握ってくれ、部屋を去っていった。

「間が悪いわ……こんなときにお腹が鳴ってしまっなんて」

恥ずかしさに頬を赤くしたまま、美緒は椅子に崩れ落ちるように座った。備え付けられた鏡を見れば、確かにキヨの言うとおり着物は皺だらけで髪も乱れて

酷い有様だった。こんな格好であの身なりの整った蒼真の後ろを歩いていたと思うと、顔から火が出そうだ。

さほど待たずにキヨはたくあんを添えた握り飯を、湯気の立つほうじ茶と共に持ってきてくれた。夕方滝が持ってきてくれたものとは違って綺麗に形は整っていて、麦は混じっていない。

温かいほうじ茶を飲んでほっと一息ついてから、キヨが握ってきたらしい握り飯を食べる。中には程良く味付けされたおかかが入っていて、滝が持ってきたものとは大違いだ。

けれど、どちらにも優しい心遣いが込められていることを美緒は知っている。

食べ終わってごちそうさまでしたと言い、キヨが皿を下げるために部屋を出ていってから、美緒は手を合わせて祈った。

「トホカミエミタメ」

遠くに御座します神様、どうぞ恵みをお与えください。

とんでもない一日でした。それでも私に優しくしてくれた人たちがいました。

今優しい気持ちになれるのは、できる範囲で優しくしてくれた滝助さん、そして使用人だからと言っておきながら身内のように気に掛けてくれたキヨさん——それと、千鳥兄さんと私を助け出してくれた蒼真様のおかげです。

そうして祈ると、心がすうっと軽くなるのを感じる。

風呂はこの家に相応しく足を伸ばせる広い湯船で豪華な作りをしていた。じっくりと体を温めて強ばった体をほぐしてから、用意されていた寝間着に着替えて部屋へと戻る。ベッドは慣れない寝心地だったが、疲れ切っていた身にはそれほど気にならなかった。

だって、ここは安全だから。

母が亡くなってから初めて、美緒は心から安堵してゆっくりと眠ることができたのだった。

「この帝都には『退魔六家』と呼ばれる方々がいらっしやって、災いから人々を守っているのよ」

古びた狭い長屋でひとつだけ敷かれた布団の中で身を寄せ合い、かつて母はそうやって美緒に様々なことを語ってくれた。

この大正の世になっても、江戸時代に作られたこの都市を守るための仕組みが働き続けていること。昔の偉いお坊様によって退魔六家が作られたこと。

そして、美緒にも見えている幽霊は、ただそこにいるだけならばそれほど怖がるものではないということ。

「お母さん、あそこに血を流した女の人があるよ。怖い」

幼かった美緒は、今までにも見えていた少し透けて見える人たちがこの世のものではないと、そのとき初めて気づいた。

日中にも生きている人に交じって歩いているのを見たこともあるし、夜にぼんやりと佇^{たず}んでいる姿も知っている。けれどそのとき美緒が見たのは、死の瞬間の記憶を鮮烈に残したのか、血にまみれ、苦しげにこちらに手を伸ばす、「恐ろしい」と本能的に思ってしまう姿をしていたのだ。

「大丈夫、あれは生きている人には何もできないの。でも、苦しくて悲しくて残ってしまっているのね。お母さんと一緒に行くべきところへ送ってあげましょう」

母は後ろから美緒を抱きしめ、小さな手に自分の手を重ねると相手のようにパンと打ち鳴らした。音が広がるのと一緒に、そよ風が美緒を中心に吹いたような気がした。涼しげな風は清らかな空気を部屋の間々まで運び、それに美緒は驚く。

「トホカミエミタメ——美緒も言ってごらんさい」

「トホカミエミタメ」

母の真似をしてたどたどしく美緒が意味のわからない言葉を呟くと、血を流していた女性^メは苦しげな表情から穏やかな顔つきに変わり、うつすらと微笑みを浮かべてから完全に消えてしまった。

「いなくなった……？」

今まで女性^メがいた場所を見つめて美緒は半信半疑で呟いた。こんなことで消えてしまふなんてという気持ちと、あの安らかな表情はきつと空の上がっていったに違いないと思う気持ちが、同時に胸の中に存在している。

母は美緒の頭を優しく撫で「よくできたわね」と褒めてくれた。母の力ではなく、美緒の力があの霊のあるべき場所に送ったのだと説明しながら。

「怖くなかったでしょう？ あれは怖いものじゃなかったのよ。お母さんは、本当に怖いのは生きている人間だと思う」

「うん……美緒もそう思う」

母に抱きついて美緒は「本当に怖いもの」を思い浮かべた。それは美緒にとつては父の姿をしている。

半年ほど前に美緒は母と共に、父の元から逃げ出してきた。それまで家族三人で住んでいた長屋から最低限のものだけを持って、美緒は今まで来たこともなかった場所を新たな住処としたのだ。

知らない街と知らない人々に不安に感じたことを今も鮮明に覚えている。だがそれよりも、恐ろしい父から逃げ出せた安堵が遥かに大きかった。

父のことを頭から振り払おうと、美緒は手のひらを見つめながらたった今起きた出

来事について考えた。

「お母さん、『トホカミエミタメ』ってどういう意味なの？」

それは美緒の知っている言葉ではなかった。けれど口に出すとしっくりと馴染み、温かみを感じる。尖ったところのない音の並びがそう感じさせるのかもしれない。

「昔から伝わっている言葉だから、本当はどういう意味かわからないんだけど……遠く神、恵み給え……遠くから見守ってくださっている神様、どうかお恵みをもたしてくださいってことじゃないかと私は思ってるわ。他にも『こういう意味じゃないか』っていろいろ言われてるんだけどね」

そのお恵みは言葉を唱える美緒にもたらされるものではなく、別の対象のための祈りの言葉のようだった。

「変なの。神様が見守ってくれてるなら、どうしてお父さんみたいな怖い人がいるの？ お祈りの言葉を唱えたら、美緒にいいことがあつたらいいのに」

「美緒、幸せになりましたかしたら、まず誰かを幸せにすることが大事なのよ。お母さんが前に話した、この帝都を守っている退魔六家の方々の話を覚えてる？」

「うん」

「時には命懸けで帝都を守ってくださってる方々よ。でもね、それは自分のためじゃないの。帝都に住むたくさんの人のために働いてくださってるの。世の中はね、そう

やって自分じゃない誰かのために何かをしてる人がたくさんいるのよ」

ああ、それはそうだと美緒は幼いながらに納得をした。今は帝都中に夜になれば当たり前のように電灯が光るようになったが、以前はそうではなかったという。

様々なことに使われる電気は、それを守り管理することを仕事にしている人がいる。そういうことを知っていたから、美緒は「自分じゃない誰かのために仕事をしている人」の存在をすんなりと受け入れることができた。

「覚えておいてね、他の誰かのためにしたことが、いつか美緒を幸せにするって。——神様はそうやって正しい心を持ち続けている人を、見守ってくださるのよ」

「神様は見守ってくれるだけなの？」

「そうね。でも、ひとりぼっちで何かをしなきゃいけないよりも、遠くからでもいいから誰かが自分を見守ってくれているんだと思ったら、人は結構頑張れるのよ。たとえば、お母さんは美緒がいるから頑張れるの」

「そっか！ 美緒もお母さんと神様が見てくれるからがんばるね！」

母の首に抱きつき、美緒は無邪気に宣言した。

翌朝目を覚ました美緒はしばらく混乱していた。見慣れた長屋の染みのある天井ではなく、西洋風のしやれた壁紙が貼られた立派な部屋にいるのだからわけがわからな

い。体を起こして周囲を見回し、昨夜覗き込んだ鏡を見てやっと記憶が蘇る。めちやくちに振り回された一日の最後に南条家にやってきて、疲れ切ってはいたが心はかなり穏やかになって眠りに就くことができたのだ。翻弄されている間は「夢だったらしいのに」と思ったが、何もかも夢ではなかった。

今は何時頃だろうと窓の側に寄ると、既に日はかなり昇っていた。時間にすれば朝の八時頃だろうか、それに気づいて美緒は青ざめる。

部屋を見回したが、今着ている寝間着以外に服がない。困り果ててそつとドアを開けると、偶然なのか近くにいたキヨが美緒に気づいて部屋に来てくれた。

「おはようございます、美緒様。ゆっくりお休みになりましたか？」

キヨの笑顔を見るとほっとする。昨日は彼女の気遣いに救われたのだ。

「おはようございます。お陰様で久しぶりに安眠できた気がします」

「美緒様、お言葉が」

小さな声でそつとたしなめられ、美緒は口元に手を当てた。

「キヨさん、おはよう。お屋敷のみなさんのおかげでゆっくり休めました。……これでいいですか？」

「ええ、よろしいですよ。美緒様の着物はアイロンを掛けてありますから、今お持ちします。でも、着替えがないのは不便ですね。旦那様もさすがにそれには気づくと思

いますが」

一度その場を去ったキヨは美緒の着物を持ってきてくれた。一緒にもうひとり女中が付いてきて、水差しから洗面器に洗面用の水を注いでくれる。できるだけ卑屈にならないように気を付けながら礼を言い、美緒は身だしなみを整えた。

キヨがあれこれと品物を持ってきてくれたので、長い髪を丁寧に梳くしって結う。梳すけば梳くほど髪に艶が出る櫛には、椿油を染みこませてあるのだろう。母がいつも「美緒の髪は綺麗ね」と撫でながら褒めてくれた髪は、編んだ癖が残っているものかなり美しく整った。

再度きつちりと髪を編み、皺のない着物を着ると大分気持ちがつきりとした。間もなく朝食だというのでふたりに付いて食堂へ向かうと、既に大きなテーブルに蒼真が座っている。

「おはようございます、蒼真様」

丁寧に挨拶をしてから、美緒は蒼真の顔を向けた。昨日は暗い場所ばかりだったし、南条邸に来てからは蒼真はすぐに自室に戻ってしまったので、彼の顔をはつきりと見たのは初めてだ。

声からも察していたが、蒼真は当主とは思えない若さだった。髪はきちんと撫でつけられていて、白いシャツは首元までボタンが掛けられており服装に緩みがない。

彼の目の色は青みがかった黒で顔立ちとしては整っているが、優しそうな印象は欠片もなかった。切れ長の目がよりそう見せるのかもしれない。

「おはようございます、美緒さん。——貴女の顔を改めてまともに見ましたが、北大路の鞠子に似ている。従姉妹だからやはり血筋なのでしょう。鞠子は貴女のお母上に似ているとよく言われていたようですから、貴女もやはりお母上に似ているのでしょうかね」

「はい、幼い頃からよく母似だと言われておりました」

蒼真に答えながら、椅子が引かれたのでそこに座る。椅子を引いてくれたのはまだ年若い使用人だ。

「旦那様、美緒様の身の回りの着物などが必要なのではありませんか？」

キヨが蒼真に声を掛け、蒼真は美緒の着物に目を向けるとハツとしていた。そのま

ま、彼は後ろに控える使用人に声をかけている。

「緒方、商人を呼んで年頃の女性に必要な物を揃えさせるように。午後からは私も時間を取れるから同席しよう」

蒼真の言葉に美緒はどうしたらいいかわからなくなった。着物の替えなら数は少ないが家に取りに帰ればいい。——けれど子爵家の婚約者という立場で見たら、美緒の着ている物はみすばらしいのだろう。それくらいは貴族の事情に疎い美緒にもわかる。

結局美緒が口を挟めないまま、朝食が運ばれてきた。美緒の見慣れたご飯に味噌汁というものではなく、皿に盛り付けられた目玉焼きと肉と豆、それに焼いたパンが添えられている。他にも朝から果物の盛り合わせなどが並んでおり、考えられないほど豪華に見える。

そして当然のように箸ではなくスプーンとフォークとナイフが並び、冷たい汗が美緒の背中を流れていった。

「旦那様、美緒様は西洋式の朝食には慣れていらつしやらないのでは」

そっと助け船を出してくれたのはやはりキヨだ。またもや蒼真はハツとしていて、南条家では「これが当たり前」なのだと思緒は気づかされた。

「食べやすい物を使って食べてください。テーブルマナーは追々学びましょう。南条家は開国直後から欧州と貿易をしていた関係もあって、あちら流の物事が多いのです。慣れてください」

「……はい」

蒼真に一言「慣れる」と言われたらそうするしかない。美緒は心の中だけで溜息をつき、こっそりと蒼真の食べ方を真似しながら朝食を口に運んだ。

緊張しきったまま終わった初めての朝食は、結局ほとんどの味がわからなかった。

最後に出された紅茶は砂糖と牛乳を入れて飲むのが決まりのようで、あまり馴染みは

ないがそのまろやかな味わいだけは美緒をほんの少し和ませた。

蒼真が仕事に出るのを使用人と一緒に見送り、美緒は緒方という使用人から屋敷の説明を受けていた。緒方は昨日の夜に蒼真と一緒に来た初老の男性で、この家を取り仕切る執事だという。

キヨは女中頭で、他にもふたりの女中が住み込みで働いており通いの女中もいるし、料理人も専属でいる。何人がこの家で働いているのか、それを女主人として束ねていかなければならないのかと思うとつい気が遠くなる。

やはり美緒にとつて、南条家は「奉公に出る」側の家としか捉えられなかった。

緒方は昨日蒼真と同行していたため、美緒の事情を知っていた。その彼の提案で、午前中美緒は洋食を食べる際のマナーを学ぶことになった。キヨは最初は昼食くらいは和食を出してはと提案してくれたのだが、マナーを学ぶ実践を兼ねて簡単な洋食を出してもらうことにする。

緒方は初老の上品な紳士で物腰も柔らかい。南条家の先々代の頃からこの家に仕えているという彼は、南条家が一般の家よりずっと「西洋かぶれ」な家で、そこで生まれ育った蒼真は違和感を覚えていないのだと説明してくれた。

洋食に慣れない美緒にもわかりやすいよう、緒方は丁寧なマナーを教えてくれた。

昼食は教わりながら食べるようになったが、蒼真がいない分緊張は薄い。美緒も朝よりは余程味わって食事をすることができた。

朝よりましだったのは事実だが、気の張りすぎで椅子に座っていたのに背中が痛くなった。食事を終えてあからさまにほっとした顔の美緒を見て、キヨは「後でおやつをお持ちしますからね」といたわってくれる。

そして、一息ついた頃に蒼真が帰宅してきた。名目上とはいえ婚約者が家に来たばかりだからと、仕事を切り上げてくれたそうだ。

「ありがとうございます、蒼真様」

キヨか緒方が「そうするべき」とこっそり蒼真に言ってくれたのかもしれないが、商人を呼ぶ場に蒼真がいるのは心強い。美緒の感覚では、おそらく「必要最小限」の加減も見誤ってしまうだろう。

——と想像していたのだが。

「どうぞ、欲しい物を選んでください」

蒼真の言葉、そして応接室に並べられた品々に美緒は困惑で固まっていた。

緒方の話では、百貨店の外商部というところの人々らしい。男性が三人に女性がひとり、反物をどんどん運び込んで南条家の応接室は今や呉服屋がそのまま移動してきたかという有様だ。

「ここにある品々は、私向けではないようです」

一見した限り、絹の小紋や銘仙など、美緒にとつてはとても普段着にできるものではないような反物が積まれている。それだけではなくて、草履や帯なども数え切れないほど並べられていた。

美緒の言葉逆の意味に取ったのか、蒼真の眉がピクリと動いた。美緒が思わず身を縮こませてしまうような冷たい声が降り注ぐ。

「この品物では不足ですか？ これだから女性とは……」

不機嫌を露わにしながら、蒼真は百貨店の店員に指示をし始める。

決して不足などあるわけがない。むしろ分不相応なのだ。それをわかってもらおうと、意を決して美緒は声を張り上げた。

「着物は木綿のものが三枚もあれば十分です。ここにある品物はどれも高価すぎて、私が見合わないのです。——そう、お伝えしたかったのですが」

「三枚？ 木綿の着物を？」

蒼真が驚いた様子で美緒に問い返す。美緒の答えは余程想定外だったのだろう。彼は手にした反物を見てしばらく動きを止めていた。

「はい、それと洗い替え分も含めて下着一式と草履一足、小物類は最低限の数があれば十分です」

自分が必要と思う物だけを告げると、またもや蒼真は呆気にとられた様子で美緒を見つめる。

蒼真の視線が美緒の頭から爪先まで通り過ぎていくのを感じた。結局彼は手にしていた反物を店員に渡し、「それを」と一言告げる。

「貴女は私の婚約者ですから、相応の格好をしてくれないと困ります。着古した様子の着物で出歩いて、『あれが南条の婚約者』と後ろ指を指されてはたまらない」

「……出すぎたことを言って、申し訳ありませんでした」

要は、今の自分がみすばらしいと言われているのに気づき、美緒は俯いた。

キヨにアイロンを掛けてもらったばかりの着物だが、やはり生地自体がくたびれた様子はわかってしまう。美緒は胃の辺りにキリリと痛みが走ったのを感じた。

貴族ともなれば体面は重要なのだろう。平民の考えで判断してしまった自分がいけないのだと、美緒は必死に自分に言い聞かせる。

「急なことですから、今回は見立ててもらいましょう。必要な物は全て揃えます」

それは蒼真の宣言であり、美緒の意思など問うてはいない言葉だった。

そして、「今必要な物」を買い終わり、仕立てのために商人が反物を持ち帰ったとき、美緒は精神力を使い切って昨日よりもうつろな顔でいた。

「美緒様、どうぞ」

「……ありがとうございます」

嵐のような一時を過ごして疲労困憊した美緒に気づいて、部屋にキヨがお茶と饅頭を持ってきてくれた。

「はあ……」

饅頭の甘さにほっとしつつ、自分と蒼真の感覚の違いに溜息しか出ない。そんな美緒に、苦笑しながらキヨが心得を教えてくれる。

「私たち庶民と違って、旦那様はいろいろな場に出られることがありますから、それに応じた格の服が必要なんですよ。それは美緒様にも言えることです」

「普段着だけではなくて、改まった場以後々出るかもしれないから、なのかしら」

「おそらく、それはそれでまた別に仕立てることになると思います。まあ、私は下着の替えが揃って安心しましたけどね」

「そ、そう……ね」

確かにそれは急ぎで欲しい物ではあった。家に取りに帰ることができれば良いのだと考えたところで、憂鬱になる案件を美緒は思い出してしまった。

「蒼真様は今お話しできるでしょうか？」

「今はお仕事をしていらいっしやいます。急ぎの用でしたらお時間をいただけるか伺って参ります」

「お仕事邪魔をしては申し訳ないですから……夕食のときにはお話しできるのかしら？」

「それは大丈夫です。旦那様に文句があったらガツンと言っておかれたほうがいいですよ」

「いえ、そんな、文句なんて……」

名目上は婚約者だが、実質的には居候だ。大金を出してもらった上に更にとんでもない量の買い物をしてもらって、文句を言うなど罰が当たる。蒼真は「良かれ」と思っているのだらうし。

過剰な恩に気が重くなる一方だが、美緒は夕食時に蒼真にある「お願い」をすることを心に決めていた。

夕食の席で蒼真と顔を合わせたとき、美緒はガチガチになるほど緊張していた。緒方にテーブルマナーは教わったがまだ付け焼き刃だし、これから蒼真に切り出すことを考えると更に気が重くなる。

自分の前に運ばれた皿を目にして、美緒は一瞬違和感を覚えた。よく見れば違和感の正体は一目瞭然で、蒼真に出された皿は一枚肉が載っているのに対し、美緒の皿には食べやすい大きさにあらかじめ切り分けられた肉が載っていたのだ。

これならば、両手に慣れないナイフとフォークを持って苦戦して食べずともいいと

立ち読みサンプル
はここまで

思うとほっとする。

おそらく美緒がまだ洋食に慣れないことを案じた緒方の采配なのだろうと思って彼の方を見ると、緒方は美緒と目が合ったときに軽く頷いてみせた。

少し気が楽になって、食事をしながら美緒は蒼真に意を決して話し掛けた。

「蒼真様、お願いがございます」

「なんですか？ 足りない物でもありましたか？」

問い返す蒼真の目には興味の色も浮かんでいない。それに、何かが欲しいという話ではないのだ。

「こちらのお屋敷から女学院に通わせていただけじゃないでしょうか。このようなお願いは図々しいこととわかってはおりますが、学費は奨学金をいただいておりますからご迷惑はお掛けしません。今年で卒業ですから最後まで勉強をしたいのです」

美緒の「お願い」が余程意外だったのか、蒼真は美緒を見つめて何度か目を瞬かせた。

「奨学金ですか、美緒さんは優秀な成績を修めているんですね。もちろんいいですよ、朝は車で送らせましょう。どちらの女学院に？」

「よろしいのですか？」

あっさりと受け入れてくれた蒼真に、美緒は驚いていた。長屋では「女がそんな立

派な学校に行つてどうするつもりだ」と言う人間が少なからずいたのだ。

「ええ、構いません。——というより、貴女が何をしていても私には興味がありません。南条家の名を貶めるような振る舞いさえしなければ」

蒼真がなんでもないのであるように言った言葉に、美緒は頭を殴りつけられたような衝撃を受けた。

蒼真は寛大なのではなく、ただ美緒に無関心なのだ。彼が美緒に求めているのは、婚約者として外部の人間に恥じないように振る舞うことでしかないのだろう。

繰り返し突きつけられる事実、腹の中に重い石を抱えたような気持ちになる。

「……ありがとうございます。翠明女学院に通っておりますので、こちらからでしたら歩いて通えます。お車などは結構です」

それでも、丁寧に頭を下げて美緒は礼を述べた。女学院に通うことが認められて良かった、そうでなかったらこの家で一日過ごすだけで息が詰まってしまうだろうと思ひながら。

あのととき蒼真が美緒を「買い取って」くれなかったら、待つていたのは花街で客を取らされる日々だったのだ。それに比べたら、安全で学校にも通わせてくれる今の状況は地獄と極楽の違いがある。——心の痛みにさえ、目をつぶれば。

「それと、私の長屋に学用品がありますので、取りに行かせていただけませんか」